

研修講義コンテンツモデル研修プラン

「注意を集中し続けることが難しい子」を題材に

対象分類：小・中学校教員（初心者）

活用形態：校内研修（全体でのビデオ視聴と少人数のグループ討議）

進行役：校内特別支援教育コーディネーター

モデル研修プランの概要（目的と対象）

この研修講義コンテンツ「注意を集中し続けることが難しい子」は、初回の研修講義「教室の中の気になる子どもたち～発達障害の特性の理解～」を受けて、より具体的な子どもの困った状況を例に取り上げています。

さて、本研修講義は、小・中学校の教員を主な対象に、校内研修会等や自己研修での使用を前提に企画しています。担当教師にとって子どもの学習面や行動面、対人関係でちょっと気になることが、発達障害のある子どもの支援の出発点となる場合が多いことから、教育現場でよく見られるエピソードをとりあげることとしました。そして、多くの教員が教育現場で直面しているエピソード等を職場の同僚と共有・共感し、学校等でよくみられる事実と関連付けて当該障害に関する基礎・基本的な事柄を学ぶことができると考えています。

研修講義コンテンツを活用した研修の流れ

研修講義コンテンツを活用した研修の基本パターンとして、最初に校内で特別な支援を必要としている子どもの中に、行動上の問題を抱えている事例について触れ、そのような子ども達にどのようにかかわれば良いのかを提起します。その上で研修講義「注意を集中し続ける子どもが難しい子」を視聴していただき、それを受けて参加者で意見交換を行い、最後に支援を必要としている子どもの具体的な教育的対応の配慮点を協議するという構成を提案します。

意見交換のプロセスは、各校の職員の実態に応じて、進行役の特別支援教育コーディネーター等が工夫してください。発言しやすい雰囲気と環境を作るためには、少人数のグループに分かれる等、全ての参加者が自分の体験を話し意見を出し合えるようにすることが重要です。その上で、それらを共有・共感するための工夫を行うと、より効果的に意見交換が進むと思われます。

まとめの部分では、あらかじめ校内特別支援教育支援委員会等で話し合って最終的な対応法について確認すると周知につながり、効果的でしょう。

以下に、研修の流れの例を示します。参考にしてください。

研修の一例（70分程度の校内研修を想定）

活 動	主 な 内 容	配 慮 す べ き 点
導入（3分以内）	・あいさつ、全体の流れを説明	
問題提起（5分） （問題の共有化）	・校内で特別な支援を必要としている子どもの事例（特に「注意を集中し続けることが難しい事例」）についての情報を伝える。	・校内委員会で整理された資料を基に参加者に伝える。
研修講義視聴 （18分）	・研修講義コンテンツ視聴（18分程度） 「注意を集中し続ける子どもが難しい子」	
意見交換(25分) （グループで）	・グループごとにビデオで紹介された教育現場でよくみられるエピソードと問題提起で出された校内の事例について意見交換 *事例の特性を整理し合い、具体的な学級、校内での支援の方法について意見を出し合う	・グループ編成は、学年毎にする等、校内の事情に応じて編成する。 ・各グループの進行役を決めておく。 ・一部の人の意見に偏らないように工夫し、全員が発言できるように配慮する。
発表（14分）	・グループごとの発表 ・代表的な疑問点や具体的な支援の方法について意見発表	・出された疑問や意見とグループ内で解決不能な課題を明確にする。
まとめ（5分）	・発表された意見を受けて、共通理解を図る事項について整理する。 ・残された課題については校内特別支援教育委員会につなげる。	・今後の課題を整理する。 ・課題となった点については、次回研修などにつなげる。

*上記の研修例は、グループを設定して協議を展開する場合を挙げている。

準備物：

- ・ 高速でネットワーク接続された PC（あらかじめ国立特別支援教育総合研究所発達障害教育情報センター（<http://icedd.nise.go.jp/blog/>）にアクセスし、センター内講義コンテンツの視聴確認を行い、再生確認しておくことが望ましい。）
- ・ プロジェクター、スクリーン、スピーカー等
- ・ 講義配布資料（上記センターで配布する資料（PDF）を印刷して配布）
- ・ グループ討議を進める際に必要なホワイトボードや記録用紙、付箋紙等

活発なグループ協議を行うための工夫

グループ協議は、限られた時間内で、参加者の考えや思いを出し合い、それを集約しながら、協議の目的を達成しなければなりません。そのためにも、より効果的な協議の運び方の工夫が求められます。

協議の運び方としては、次の点に留意することが必要です。

- ①参加者それぞれの考えや思いを出し合い、それを整理すること。
- ②協議そのものの流れ、合意形成の仕方をおさえること。

【参加者それぞれの考えや思いを出し合って整理するための方法例】

●KJ法の活用

研修会では、協議参加者が子どもの実態や関わり方の工夫、子どもの力をふまえた教材の工夫など協議参加者が思い浮かんだことカードに書き出し、それらを並べて、比べながら共通する部分、相反する部分等と整理していきます。その過程で、いくつかの解決策を見だし、共通理解が図るのに有効な方法です。

（参考：フリー百科事典『ウィキペディア（Wikipedia）』）

●ウェビング法の活用

模造紙や画用紙程度の紙の中央に取り組む課題（疑問、問題）を書き、そして、その言葉から思いつく言葉を書き出しては次々と繋げていきます。その過程の中で、調べてみたいことや調べる方法を丸や四角で囲んだり、あるいは、文字の色を変えて具体的なアプローチの内容と方法、あるいは結果を明確に分けていく工夫も考えられます。また、このような活動を通して、実際の足跡をたどったり、キーワードをチェックすることで、「自分（自分たち）は、課題解決のためにどのように動いたのか」を振り返る際にも有効に活用できます。（参考：加藤幸次（1996）「総合学習的発想—授業にどう入れるか」）

※KJ法はいくつかの課題を挙げてから、本題に迫っていくという収束思考を助ける方法であるのに対して、ウェビング法は特定の課題を皮切りに、いろいろな関連要素（指導内容、方法、環境整備等）に考え方が広がって整理していくという拡散思考を助ける方法です。両者は、全く逆の思考の流れをたどる手法ですので、研修（協議）目的に合った使い方を選択する必要があります。